

the four years he was in Japan, Dr. Lambuth tried his best to communicate his concern and the good news of the Bible to the people in their own language.

Eventually, Dr. Lambuth became a Bishop of the Methodist Episcopal Church, South with responsibilities for world missions. Among the principles that guided him was the firm belief that the “best, ablest, and most broadly cultured men specially trained for the work,” should be sent as missionaries. In other words, to serve the needs of people around the world, the Church should select and train people who were “masters” in their fields.

As members of the Kwansei Gakuin community, we are inspired to become the best we can, morally and intellectually. Let's take our founder's example to encourage us on our own journey.

(Chancellor)

「建学の精神」はあなたにも必要？

井 上 琢 智

1889年に神戸原田の森に生まれた関西学院は、創立者を南メソヂスト監督教会の宣教師 W.R.ランバスとし、神学部と普通学部（後に中学部と改称）とからなる小さな私塾のような学校であったことから分かるように、その「建学の精神」を「キリスト教主義 ‘Principles of Christianity’」におきました。この原語が示すように、「主義」とは「原理」のことであり、その原理も複数であることは、今なお注目しておく必要があります。そこにはキリスト教を基礎とするものの、「寛大さ ‘magnanimity’」（ベーツ第4代院長のことば）が重視されています。ただ、その「寛大さ」は「よい意味での家族主義的な暖かい雰囲気」や「相手の人格を認めて干渉しないという消極的」なものではなく、さらに進んで「相手を自分自身に対する根本的な問いとして真摯に受け止めるような能動的」なものではなくてはなりません。

さらにこの「建学の精神」は、「常にその時々のできものの具体的な現実の中で問い直され、具体化される努力が払われるのでなければ、死語」となります。まさ

に「建学の精神」の持続と浸透は、日々の私たちの「運動 ‘movement’」でなくてはなりません。漕ぐのを止まれば、倒れる自転車のようなものなのです。この123年に渡って、関西学院が教育機関として存続できたのは、その歩みに遅速はあるものの、先人たちが絶えず漕ぎ続けたからなのです。

ところで、「建学の精神」の役割は、関西学院という教育機関だけのことではありません。実は、そこに属する人びとすべての日頃の生き方にも通じるものなのです。人には生まれたときから与えられた「賜物」「天分」「才能」があります。私たちは自分だけの内なる「建学の精神」を見つける必要があります。しかし、加えて、それらを開花させるには、日々の私たちの絶え間のない「運動 ‘movement’」が必要なのです。まさに「高貴な粘り ‘Noble Stubbornness’」が求められているのです。今からでも遅くありません。一緒にすぐにでも始めましょう。

(学長)

神戸三田キャンパスと建学の精神

松 木 真 一

神戸三田キャンパスの理工学部と総合政策学部は、今年も合わせて1100名を超える新入生を迎えました。彼ら新入生たちは西宮のキャンパスの新入生とともに関学大生として新しく歩み始め、もう1ヶ月半が過ぎました。関学唯一の理系・理工学部は現代科学技術文明の最先端で研究研鑽を通して、人類の進歩に貢献しようとしています。総合政策学部は現代の日本・世界の山積みの課題難題と向き合い、現実的実践的な解決の道を探求し続けています。私たちの直面している現況—この国が、激しく揺れ、こわれ始め解体し始めていくような不安感と危機的な状況のただ中で、両学部生に求められている期待は他学部生同様、限りなしです。新入生がこのキャンパスでこれから学び研鑽する意義は、この意味で絶大なものです。

学び研鑽とはいっても、それはただ漠然としたものでも知識や業績の積み重ねでもありません。そこには終始、一つの明確な理念が貫かれています。建学の精神として簡潔に表された「マスタリー・フォア・サービス」がそれです。この標語は、